

<会員による自著紹介>

初年次教育の現状と未来

初年次教育学会（編）

世界思想社（2013年発行）
定価 2,500円（税別）



日本において初年次教育が注目を浴び始めたのは2000年代半ばのことである。特に、ここ十年間での急速な広がり著しい。初年次教育の概念や位置づけが定まっていなかった2000年代初頭と比べると隔世の感がある。

初年次教育学会が、2008年に設立されて以来、学会は、講演会やワークショップなどを通じて研究者や大学間での情報交換や人的ネットワーク作りを行う場、初年次教育のノウハウを構築する場として機能してきた。本書は、2012年に学会設立5周年を迎えたことを契機として、初年次教育の現状を踏まえ、新たな未来に踏み出すための記念となる一冊である。

本書は、3部構成となっており、第1部では、高等教育における初年次教育の位置づけについて、これまでの経過、高等教育研究、中央教育審議会や海外の動向を交えて論じるという理論的な側面の整理を中心に据えている。第2部は、初年次教育の構造についての理解を図ることを目的として、初年次教育を支えるディシプリンや方法論の紹介から構成されている。第3部は、初年次教育における多様な手法の開発につながることを意図して、現在確立はされていないものの、将来的には発展が予想され、初年次教育においてもその活用が期待される先導的な手法の紹介から構成されている。

初年次教育は、学士課程教育の一環として捉えなおすことが不可欠となっている現在、学生の成長を4年間というスパンで見えていくとすれば、初年次教育だけでなく、学士課程教育全般でも共通となる手法や方法論、されには正課内外での連携という、縦割りの大学構造を越えて、学生を支援するという視点もしくは教学マネジメントが求められている。本書が関係者にとって新たな視点の獲得への一助となればと願っている。（文責 山田礼子）